

## 友だちの思いやその子らしさを受けとめ合って生活していく姿を支える

～いろいろな友だちとのかかわりの中での葛藤や歩みよりに着目して～

4歳児 さくら組 担任 石橋 かおり

### はじめに

私たちは近年、園の子どもたちの実態として仲良しの友だちへのこだわりが強く、友だち関係が広がりにくくなってきている、と強く感じてきている。

また、保護者同志がグループ化していく傾向にあり、そのためお互い周囲の保護者に気を使い合い、ストレスになっている、という保護者の悩みを耳にすることもある。

そこで、私は、4歳児の各期にどのような姿に立ち止まり、どのようなことを大切にして援助していけばよいのだろうか、を追求していきたいと考えた。

4歳児さくら組の子どもたちのかかわりを見つめてみると、次のようなさまざまな姿があり、その時どきの姿や様相に立ち止まって考え、保育にあたってきた。

- ・入園して初めてなかよしになった友だちにこだわる姿や様相
- ・仲良しの友だちとは呼応し合えるが、それ以外の友だちとはなかなか呼応し合えない姿や様相
- ・言葉に表さないと友だちの気持ちが受けとめにくい姿や様相
- ・友だちの姿や行為に興味をもって寄り添っていく姿や様相
- ・トラブルを通して友だちの気持ちに気付き、寄り添っていく姿や様相
- ・あまり遊んだことのない友だちとぶつかり合いながらかわっていく姿や様相

初めて仲良くなった友だちに親しみや愛着を感じ、そのつながりのもとに安定していくということは、この時期の子どもたちにとって大事な成長のステップであり、喜ばしいことであると思う。しかし、その友だちがいなければ不安になってしまい、自分らしさが出せないという姿も見られることもある。そのため一人一人が自分なりに考え、感じ、行動したりかわっていったりすることをこの時期の保育として大切にしていきたいと思う。

また、この時期においてはかかわりの深さにかかわらず、時々起こるトラブルは自分の気持ちを主張し、相手の気持ちに気付いていくきっかけになることが多い。4歳児では、はじめから譲り合ったり、受け入れ合ったりということを求めすぎることなく、いろいろな人とお互いに気持ちをぶつかり合わせる経験をし、そこで自分なりにいろいろな思いを味わい考え、気付いていくという「学びのプロセス」がとても重要なことと思われる。そこで次のような仮説をたて、研究をすすめていこうと考えた。

## 《仮 説》

子どもたち一人一人が園生活の中で友だちとかかわりながら自己表出していく姿を見つめその中で経験していることに保育者自身が立ち止まり、お互いの思いを受けとめていくきっかけになるよう支えていけば、子どもたちの中で柔軟に受け入れ合うかかわりや心情が広がっていくであろう。

「友だちとかかわる心情」の育ち、表し方は子どもによってかなりの個人差がある。また、かかわる相手が誰であるのか（仲良しの友だち、時々かかわる友だち、初めてかかわる友だち）によっても思いの表し方は違ってくる。

私は、4歳児の8期～10期の学級の子どもたちのエピソードから各期に大切にしていきたいことはどのようなことかを探り、上述のテーマに迫っていきたいと考えた。

## 8期（6月上旬～9月中旬）の記録より

### 《この期の学級の子どもたちの友だちとかかわる姿》

- ・入園当初から保育者との信頼感や色々な友だちとかかわる楽しさのもとに次第に安定していった子どもたちは、5月下旬頃より気の合う友だちが生まれてきた。初めはそのつながりは固定したものではなかったが、6月、7月と次第に仲良しの友だちとの親しみが深まる中、確かなものになっていった。

### 《保育者がこの期に大切にしていたこと》

- ・共に楽しめる友だちとのふれあいは、この期の子どもたちにとって安定感につながるものであり、意欲を高めていくことにつながっていくので、それを大切に支えていく
- ・また、子どもたちが自分なりの思いや願いをもって見つけた遊びを存分に楽しむことを大切にする。そんな時期にエピソード①のようなトラブルがみられた。

### エピソード① 「あー、わたしたちがつくったのに。」

6/20

ゆうか、ひみこ、みさこの3人が泥んこケーキを作った。みんなが片付け終わってもゆうか「もうすぐできるから。」と最後まで作ろうとする。花で飾りをつけ、とてもきれいなケーキが出来上がり、満足してTと一緒に宝箱（テラスにある大事なものを取っておく場所）の前のテーブルに置いた。Tはゆうかたちが心を込めて作ったケーキを学級みんなに紹介し、「そーっと大切に見てね。」と話をした。

6/21

そうたがゆうかたちのケーキを使って砂遊びをしている。Tが「あれ、そうたちゃんそれゆうかちゃんたちが昨日一生懸命作ったケーキじゃない？」と声をかけると

そうた は手を止めた。

様子に気付いてゆうか、ひみこ、みさこ、みならがやってきた。

ゆうか 「(砂や花を) 取る前に自分で取ればいいじゃん。」

ひみこ 「あー、ひみちゃんたちが作ったのに。」

みな 「いけんだったね、ゆうかちゃん。」

そうた はしばらく考えていたようだったが、園庭に走って行って戻ってきた。手には3本の草花を握っている。

そうた 「これ？」 女の子たちはケーキをどう直そうかという相談をされていて気がつかない。

T 「ひみこちゃん、ゆうかちゃんたち、そうちゃんがお花取ってきてくれたんだって。」と、そうたの思いを知らせようとした。

ひみこ 「もっといっぱいあった。」ひみこ たちは納得しない。

そうた (どうしようかという表情でしばらく考えているが) 「ここに置いとくよ。」と草花をテラスに置いて走り去る。

ゆうか、ひみこ 「お花取りに行こう。」と今度は自分たちが園庭に出掛けて行った。

そうた も ゆうか 達が一生懸命作ったケーキであることは承知していたと思われる。

ゆうか たちに責められてどうにかしようと花を摘んできたが、ゆうか たちはそれでは納得しなかった。その時初めて そうた は、自分のした事がどのようなことであったか、そして、ゆうか たちにとってどのくらい大事なケーキであったか、受けとめたのではないだろうか。

ケーキを直すこと、「ごめんなさい。」と謝ることなどよりも友だちの思いを真剣に受けとめていくことをまず大切にしたいと感じた。

## エピソード② 9/11 「ここは街じゃない？」

雨の日の保育室で こうぞう が「おもちゃやさん」、けん が「ヨットやさん」をそれぞれにこさを広げて始めた。ひでかず も興味をもって こうぞう に仲間入りした。

こうぞう 「へい、らっしゃい。」

T 「何がありますか。」

こうぞう 「くつはどうですか。」と折紙で切った  このような形を見せる。

T 「いいですね。これください。」

こうぞう 「はい。ありがとうございます。」

ひでかず 「ジュースもあります。」とままごとのコップを差し出す。

T 「おいしそうですね。いただきます。」

ゆうこ 友だちのお店ごっこの雰囲気やTとのやりとりに興味をもった様子で見ている。

る。そして、**こうぞう** たちの「おもちゃ屋さん」の隣にござを広げて **ゆきこ** と遊び始めた。

T 「ここもお店？」

**ゆうこ** 「違う。ここはお家。」

**あゆむ** 「ぼくもお店だよ。」と **ゆうこ** の隣にござを敷き始める。

T 「あーちゃんもお店？だんだんお店が増えてきたね。」

**ゆうこ** 「ってことは街じゃない？」

T 「本当だ。街みたいだね。」

保育室に帰ってきて友だちの様子を見て

**ひろと** 「地図を描こう。」という。

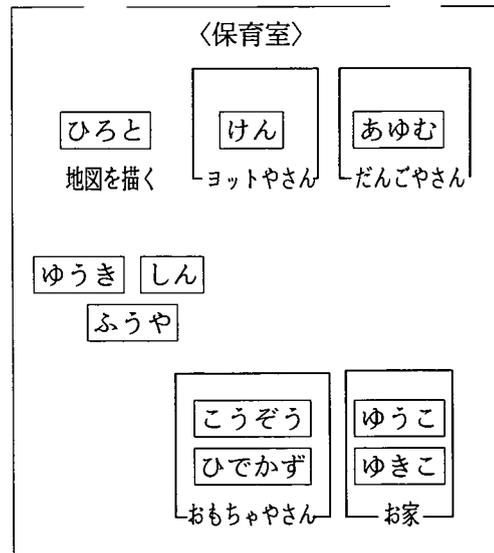
**ゆうき**、**しん**、**ふうや** も一緒に描き始める。

**あゆむ** 「らっしゃい、らっしゃい、ここは団子屋さんですよ。」

**けん** 「団子さんの隣はヨットやさんだよ。」

T 「仲良しなのかな。ここはさくら組商店街みたいだね。」

T 集合時にこのような様子をクラスの子どもたちに伝えた。



**ゆきこ** との関係に固執しがちの **ゆうこ** であったが、友だちの遊びから触発されたり、クラスの友だちが呼応し合う姿を喜んで受けとめたりしている。このような心の動きを大切にしていきたいと感じた。

また、にぎわっている保育室の雰囲気を感じ取って地図を描こうとするような感性を大事にしたい。年中時には、こういう呼応から次第にクラスの友だちとの気持ちのつながりが育っていくのであろう。

## 9期（9月中旬～1月中旬）の記録より

### 《この期の子どもたちの友だちとかかわる姿》

8期のおわり頃から少しずつみられた色々な友だちへの関心が広がりつつあった。

### 《保育者がこの期に大切にしていたこと》

色々な友だちへ関心を向けてかかわっていく姿を大切にし、そのなかでいろいろな思いを味わう経験を大切にしたい。そして、「頑張りハート」「みんなと仲良くなるハート」になりたい、という子どもたちの気持ちを受けとめ、「ハートを大きくしよう」を合い言葉に生活していった。

エピソード③ 9/21 「これ、使いたかったのに。」

あき が登園時に家から絵のついたプラスチック製のコップ（ファーストフード店でジュースが入っていたと思われるもの）を2個持ってきて、材料入れの箱に入れた。

あき とTが園庭から帰ってくると、保育室でかこ が粘土でお団子を作り、あき が持ってきたコップに入れている。それを見て

あき 「これ、使いたかったのに。」

かこ 、保育室にいたちはる、さやか、その言葉を聞いてしばし考え込む。そしてちはる が、テラスの宝箱からコップを1個持ってきて、あき に渡した。

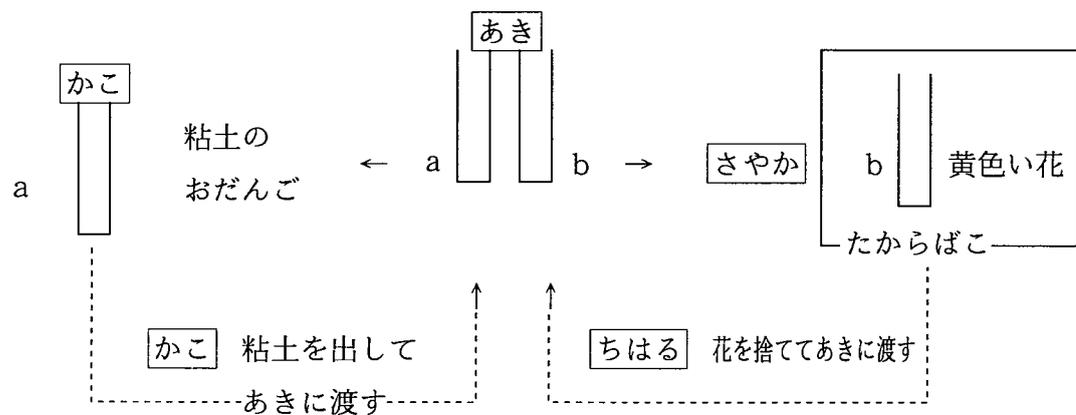
さやか 「あ、ちゃんと宝物箱に入れてたのに。」それは、さやか が黄色い花を摘んで宝箱に入れて置いたものだった。ちはる は、あき の思いをどうにか叶えようと、宝箱でもう1個のコップを見かけたことを思い出し、中に入っていた花を捨ててあき に渡したのだった。ちはる は さやか にコップを返した。

子どもたちはまたしばらく考え込んでいたが、かこ がコップから粘土を出してあき に渡した。

T 「かこちゃんいいの？」 かこ は黙ってうなずいた。

T 「ありがとう、かこちゃん。あきちゃん、かこちゃんがお団子を出して、コップを空けてくれたよ。」

あき 「ありがとう。」



みんなが使う材料入れにあきが入れた時点で保育者はみんなのために持ってきてくれたものであり、誰が使ってもいいだろうと思っていた。子どもたちもそう受けとめていたであろうと思う。けれどもあきには、持ってきたコップに対する思い入れがあり、友だちが使っている姿を見たときにその思いが蘇ってきたのかもしれない。

その思いに対して、「みんなの箱に入れてたから、使っていると思ったんじゃない？」と大人の理屈を伝えようかとも思ったが、しばしとどまって子どもたちが友だちの気持ちをどう受けとめ、どうしたら納得していくかじっくり見守ってみることにした。そして、子ども

の解決の仕方というのは、大人の思いもよらないところへ納まっていくものであるということに改めて感じた。一人一人が真剣に受けとめ、葛藤しながら解決策を探っていこうとする経験が貴重であると思う。

ここで、最終的に「かこ」が譲る形になったわけであるが、「かこ」のおだんごを入れるものが他にないかみんなと一緒に探すなどして「かこ」の思いをフォローしていくことも必要であったのではないかとと思われる。

#### エピソード④ 9/29 「いーれて。」

(「ふうや」、「もとひろ」、「ゆうき」、「ひろと」は年少時同じ学級であり、気心が知れている。)

「ふうや」 「遊戯室の積み木使いたいけど、年長さんが全部使ってる。」と遊戯室から「もとひろ」、「ゆうき」と一緒に帰ってくる。

「もとひろ」 「じゃあ少し貸してって言えばいいじゃん。」

その時、保育室で中積み木で遊んでいる「ひろと」の姿に目を止めた「ふうや」。

「ふうや」 「ねえ、ひろとくん、いーれて。」とバトンを口に当ててメガホンのようにして言った。

「もとひろ」 「いーれて。」と同じ調子でバトンを使っている。「ひろと」 「いいよ。」

「ゆうき」 「いーれて。」と同じようにする。「ひろと」 「いいよ。」

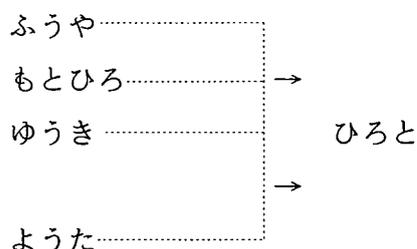
「ひろと」 は嬉しそうに一人一人の呼び掛けにこたえていた。

「ようた」 「いーれて。」廊下から小さな小さな声でバトンを手にして言った。

「ようた」 は遊戯室の積み木が使いたいという「ふうや」の言葉を聞いて遊戯室の様子を見にいった帰ってきたところだった。

「ようた」 はこの頃時折手持ち無沙汰な様子でぼんやりしてしまうことがあったので、Tはなんとか「ようた」の心を揺り動かす遊びを見付けるきっかけはないか、と思っていたところであった。

「ようた」 の声は小さなつぶやきだったので、他の子どもたちには聞こえていないようだった。



T 「ようたくんが『いーれて。』って言ってるよ。」 「ひろと」 「いいよ。」

T 「『いいよ』って。よかったねようたくん。」

「ようた」 「うん。」

「ふうや」 「松江城にしよう。」 「ひろと」 「いいねえ。」

ようた 「人がこの位かな。」と側にいたTに手で示す。

T 「うん。それ位かもしれないね。」

ゆうき 「ほんとは六道湖の向こうにもお城があるんだよ。」

ふうや 「それは、太平さんのところだよ。」

ふうや 「ひろちゃん知ってるか。知ってたら言ってみてごらん。」

このころになると、もう3歳児から一緒の組であった3人の遊びになってしまっていた。

ようた しばらくしてピアノの椅子に座って本を読み始める。

年少時同じクラスであった4人は、割合気軽に声をかけたり受け入れたりすることができた。ようたは、バトンを使って「いーれて。」という姿に魅力を感じ、心動かしたようであった。このように自分から心動かし、働きかけ仲間入りしたという経験は、貴重なものであったと思う。

そして仲間入りをしたが、積み木をどんどん積みかえていったり、さかんにやりとりしたりする4人の遊びのペースについていけないところがあったようである。

初めてかかわる友だちに声をかけたり、受け入れたりし、短時間であってもふれあうひとときをもち、お互いの存在を身近に感じる経験を重ねていくうちにいろいろな友だちと受け入れ合う柔軟さが育っていくのではないだろうか。

#### エピソード⑤ 10/6 「見てるだけ」

もも、みちこ 回旋塔でご馳走作りをしている。

T が見に行くと、

もも 「なんでもレストランだよ。看板もあるよ。」みちこ と2人でTに色々なご馳走をふるまってくれた。

あき その様子を見に来る。

T 「お客さんですか。」

あき 笑って首を振り「見てるだけ。」と言う。

あんな、こずえ 回旋塔に腰をかけ、興味深そうに見ている。

T 「お客さんですか。」

こずえ 「休んでるだけ。」

みちこ 「また明日子ども連れてきてもいいよ。サービスしてあげる。」

T 「子どもはサービスしてくれるの？」

みちこ 「大人もサービスしてあげる。」

T 「ありがとう。じゃあ明日も来るよ。」

あんな「味噌汁作った。」と こずえ と一緒に持ってくる。

こずえ「ぬくいから。最初は冷たかったんですけど。」

Tは、直接子どもたち同士がかかわっていくきっかけになればと願い、声をかけたが、この時の子どもたちは、友だちの遊びに関心をもってじっと見つめ、刺激を受けて自分の遊びに取り入れていった。また、下線の みちこ の言葉からわかるように、直接かかわりはなくとも友だちが関心をもって来てくれたことを喜んでいる。

このように、まずは友だちの姿に関心を向けていくことが第一歩であり、そこから、直接かかわっていくこともあれば、刺激を受けて自分の遊びに取り入れていくこともあり、関心を向けてもらったことから意欲を高めていくこともある。保育者はこのようなことを考慮しながら、急がず、焦らず、友だちの姿に気持ちを向けていく姿をとらえ、多様な言葉でその思いを受けとめ、支えていくことが大事であると感じた。

エピソード①にもでてきた そうた のこの期の姿を追ってみたい。

#### エピソード⑥ 10/7 「とんこつラーメン」

かanta、そうた 築山の下赤土山で型抜きをして「ケーキやさんごっこ」をしている。

かanta 「ぼくはりんご（ケーキ）にしよう。」などと思い思いのケーキを作ってワーワーととても楽しそう。

T お客さんになって食べていると、

けんいち 「とんこつラーメン。」とバケツに泥んこを入れて持ってくる。

T 「とんこつラーメン大好きなんだ。いただきまーす。ああ美味しい。」と食べる真似をし、かanta、そうた に「食べますか。」と勧めてみる。

そうた 「いらんわい！」と振り払う仕草をする。

かanta 「いらんわい！」と振り払う仕草をした かanta の手がバケツにあたり、とんこつラーメンはひっくりかえってしまう。

けんいち びっくりして立ちすくんでしまう。

T 「わあ、けんちゃんの大事なラーメン・・・」

けんいち 築山の下のトンネルの中に入ってうずくまっている。

T トンネルを覗いてみると けんいち は涙ぐんでいる。

「けんちゃんが一生懸命作ったのにね。」と言いながら けんいち の背中にそっと手を添えた。

けんいち が気を取り直して今度は焼きそばを作り始めた。

その時、トンネルの上から「とんこつラーメン」と言いながら覗く子どもがいる。そして、それは2、3回続いた。そうた であった。

T 「けんちゃん、美味しい焼きそばができそうだね。」というとき、  
[そうた] 「言葉で言わんでいい。」とTに言い、「そうちゃんも手伝ってあげる。おれ  
たちも手伝ってあげよう、かんちゃん。」と [けんいち] の焼きそば作りを手伝い始める。

少々ふざけた調子で「いらんわい。」とふり払う仕草をしたつもりが、とても相手を傷つ  
けることになってしまったことに気付いた [かんだ] と [そうた] であった。

ここで注目したいのは、いけないことをしてしまった、と受けとめた [そうた] が [けんいち]  
に歩み寄っていく姿である。「ごめんね。」という言葉ではなく、[けんいち] の焼きそば作り  
を手伝うことで [けんいち] の傷ついた心に寄り添い、癒そうとしている。このように自ら相  
手の痛みに気付き、自分なりに真剣に受けとめて行動していくというステップを大切に見守  
り支えていきたいと思う。

ここでの保育者の役割は、まずとても傷ついている子どもの側に立って思いに寄り添って  
いくことであったと思う。そして、もし、[そうた]、[かんだ] があまり気に留めていないよう  
な様子が見られたならばその時にはしっかりと向き合わせていくことであったと思う。

#### エピソード⑦ 11/20 「幼稚園の長靴借りてきたら？」

[しずか] 「ゆうかちゃんやみさこちゃんが一人にした。」と泣いている。

[なな]、[ゆうか]、[みさこ] が長靴で水溜まりに入っている。

[しずか] は靴を履いている。

[なな] 「『しずかちゃん濡れると帰る時困るからだめだよ。』って言った。」

[ゆうか] 「しずかちゃん、幼稚園の（飼育当番用の）長靴借りてきたら？」

[ひみこ] 「ひみちゃんが悪いわけじゃないけど、『ひみちゃんの靴は濡れないよ。』  
って言ったら泣いたの。」（[ひみか] はレインシューズを履いてきていた。）

[しずか] はこのところ「だめ」という言葉や疎外感にかなり敏感になっている  
様子である。

T 「しずかちゃん、ゆうかちゃんが言うように幼稚園の長靴借りてきたら？」

[しずか] うなずく。そして、Tの手を引こうとするので、

T 「誰かついていってあげて。」と促す。

[ゆうか]、[みさこ]、[なな] 「はい。」と言い、4人で長靴を借りに行き、

[しずか] が履き替えてくる。

[ゆうか] 「ねえ、ねえ、遊戯室で遊ぼう。」

[みさこ]、[なな] 「うん。」

T 「せっかくしずかちゃんが長靴履いてきたのに。」

[ゆうか] 「じゃあ、一回だけ行こう。」

子どもたちは率直に自分たちの思ったことを友だちに伝え、また、自分が言ったことを保育者にきちんと伝えている。このような力が育っていることをまず大切に受けとめたい。

下線部でTがついていくのではなく、「誰がついて行ってあげて。」と促したのは、他人ごとではなく、友だちの気持ちにより寄り添ってほしいと願い、そのきっかけになるかもしれないと願ったからである。

また、**ゆうか** は自分のペースで遊びをリードするところがあるが、長靴に替えてきた**しずか** の思いにも立ちどまらせたいと考え、声をかけた。幼稚園の生活の中では、保育者がこの時にした役割を友だちがする時もあれば、このように援助が必要な時もある。様々な経験を通して、一人一人が自分で考え、自分の気持ちを素直に表しながら友だちの思いにも立ち止まり、寄り添っていけるよう援助していきたい。

この頃になると次第にいろいろな友だちの遊びに関心をもって、声をかけたり、受け入れたりする姿が増えてきた。

#### エピソード⑧ 12/1 「やめたいけど、やりたい」

**ゆう** 家からあてくじを作ってくる。

**ふうや**、**しん**、**このみ**、**りょうへい**、**あゆむ**、**けん**、**けんいち**、**あんな**、**こずえ**

らたくさんのごどもたちが関心をもち、「やらせて。」とやってくる。**ゆう** は、嬉しそうに受け入れ、張り切って対応している。

**あゆむ** 「あたりー！！イエーイ！」

**ふうや** 「ふうくんだけはずればっかり。」と泣きだす。

**ふうや** 「やめる。やめたいけど、やりたい。」

T 「ふう君、あきらめないでやごらん。今度やったらあたるかもしれないよ。失敗は成功のもと。」

**りょうへい** 「じゃあ、一回だけやって。」

**ゆう** 「今度は目あけてもいいけん。」

**ふうや** 友だちの言葉に気を取り直してもう一度やってみる。

**ゆう** 「ルーレットチャンス！あたり！」

T 「ふう君、あきらめないでもう一度やってみてよかったね。」

**ふうや** 安心した顔でうなづく。

**ふうや** の落ち込んだ気持ちを勇気づけ、動かしたのは、保育者の言葉ではなく、**りょうへい** と**ゆう** の言葉であった。子どもたちの友だちに寄り添っていく姿を見ていると、自分自身も友だちとのかかわりの中で様々な思いを味わってきたからこそ心底から友だちの思いに近づいていけるのだらうと思う。また、子どもの世界の遊びのルールは、子ども同士で了解し

合っていくものであると思うが、保育者は目をつぶってするというルール自体を緩めることには全く考えが及ばなかった。子どもたちの友だちを思いやる気持ちがこのような柔らかな対応を生んでいくのであろう。

## 10期（1月下旬～）の記録より

以上のようにいろいろな友だちとのかかわりの中で様々な感情体験をしてきた子どもたちは、10期に次のような姿を見せるようになってきた。

- a あまり一緒に遊んだことのない友だちへも勇気を出して声をかけたり、それを快く受け入れたりする姿
- b いろいろな友だちの様子を感じながら生活し、声をかけあい呼応していく姿。
- c 友だちの困っている気持ちや悲しさなどを受けとめ、自分たちでどうにか気持ちを和らげていこうとする姿。
- d 学級の多くの友だちが自然に同じイメージを楽しんでいく雰囲気
- e 学級の子どもの気持ちが自然に寄り集まりひとつになってきた。

それぞれについて簡単なエピソードをあげる。

### エピソード a 2/5 「もう5歳だから言えるよ。」

ゆうこ、みちこ S字滑り台の上で二人でレストランごっこをしている。

T お客さんになっていると、あんな、こずえ 滑り台の上に上がってくる。

こずえ 「ねえ、私、レストランの人になりたい。」

T 「ゆうこちゃんとみちこちゃんにきいてごらん。」

あんな 「私、もう5歳だから言えるよ。」「いれて。」

みちこ、ゆうこ 「いいよ。」

### エピソード b 2/22 「水溜まりがあるから恐いでしょ。」

ゆうか、しずか、みさこ、ゆうこ、みちこ がターザンロープ近くの木の下で「カレーやさんごっこ」をしていた。

ちはる Tを呼び、Tと一緒に総合遊具にあった台をターザンロープまで運ぶ。

そして、ターザンロープに乗ろうとして下に大きな水溜まりがあるのに気がついた。

「なんかこわいな。」と小さな声でつぶやく。

ゆうか 「水溜まりがあるから恐いでしょ。」

ちはる 「うん。ゆうかちゃんやってみる？」

ゆうか 「ううん。水溜まりがないときはできるけど。」

仲のよい友だち同士であれば、なんのことはないやりとりかもしれない。けれども、ちはるはゆうかたちとあまり一緒に遊んだことがない。ゆうかは、自分の遊びをしながらも、ちはるのようすを察知して声をかけていた。いろいろな友だちと生活のふとした場面でこのように呼応し合いながらかかわっていけるのが10期の姿であると思う。

エピソードc 2/23 「一緒に『ごめんね。』って言ってあげようか。」

9:50

ちはる が総合遊具の上から木を落としてしまい、ゆうこの頭に当たった、と子どもたちが慌てて呼びにくる。

T 行ってみると直径2センチぐらいの木の枝がゆうこの頭に当たったとこのことでゆうこは大泣きしている。

T ゆうこを膝に抱き、頭を撫でる。たんこぶも血も出ていないようである。

「痛かったね。急に枝が落ちてきてびっくりしたね。」

T 「ちーちゃん、ゆうこちゃん泣いてるよ。下りてきて。」というが、

ちはる 総合遊具の上で押し黙ったまま動けずにいる。

まわりの子どもたち、「ちーちゃん、下りておいで。」「投げたらいけんよ。」などと口々に言う。

T 「保健室に行って冷やしてもらおうか。」とゆうくと二人で保健室に行く。

みちこ、もも 心配してついてくる。養護の先生に診てもらい、小さなドライアイスを借りて冷やす。

T ちはるのところへ行き、話を聞く。「どうしたのちーちゃん？」

ちはる 押し黙ったままである。

T 「下に誰もいないと思って落としちゃったの？それとも落とすつもりがなかったのに落ちちゃったの？」

みちこ 「わざとじゃないの？」

みちこ 「一緒に『ごめんね。』って言ってあげようか。」

もも 「言えなかったら代わりにいってあげようか。」

ちはる 答えない。

10:25

ちはる 「せんせーい、ゆうこちゃんと仲直りできた！」と走ってやってくる。

T 「よかったねー。どうやって仲直りしたの。」

ちはる 「『ごめんね。』っていったの。」

ちはるが自分の中で気持ちを整理するには、これだけの時間が必要であったのであろう。

木の枝を落としてしまったちはるに対して、みちこ、もものように寄り添ってくれる友だちの存在はとても心強かったことと思う。保育者の言葉よりずっとちはるの心に響いたと思われる。子どもたちの友だちに寄り添う姿からはっとさせられることも多くなってきた。

#### エピソード d 1/29 サンタクロースごっこ

ようこ、もも、あき、こずえ、あんな 椅子を並べてそりに見立て、縄に鈴を通して持ち、リンリンと鳴らして「サンタクロースが来たよ。」と言う。

一番前のようこは「トナカイだよ。」と言って満面の笑みを浮かべている。みんなにこにこととても楽しそうである。

その楽しそうな雰囲気保育室にいた子どもたちは目を奪われて、しばし見つめていた。

その内、誰かが電灯を消した。夜になったということらしい。そしてあゆむ、もとひろたちが、ごろんと床に寝そべった。すると、サンタクロースたちは寝ている子どもたちのそばに絵本やタンバリンなどのプレゼントを置いていく。その様子を見て、3、4人の子どもが寝そべりはじめた。Tも仲間になって一緒に寝そべってみると枕元に絵本が届けられた。

あゆむ 「あーちゃんもサンタさんになりたいな。」

ようこ、もも 「いいよー。」

ひろと、もとひろ たちもサンタクロースの仲間になる。

こうぞう 「入れてほしい。入れてほしい。」とTに向かってつぶやく。

T 「自分で言わなきゃ。」と励ます。

こうぞう 小さな声で何度か言うが聞こえない様子。

けんいち 「いーれて！」と大きな声で言う。「いいよー。」とサンタクロースたち。

こうぞう、けんいち の姿に背中を押されたかのように、同じくらいの大きさの声で「いーれて！」という。「いいよー。」と快く受け入れられ、しばしみんなでサンタクロースごっこを楽しんだ。

このように、友だちの遊びの楽しい雰囲気に自然に乗っていき、同じイメージや雰囲気を大勢で楽しむ姿が見られるようになってきた。「おすし屋さん」「ひまわりレストラン」などのごっこ遊びに子どものお客さんが増え、とても楽しそうにやりとりする姿が増えてきたのも、そのひとつである。

言葉で表さなくても友だちの様子を受けとめて電気を消して夜にしてみたり、子どもになって寝てみたり、寝ている子どもにプレゼントを配ったりする感性の育ちをととても興味深く嬉しく受けとめた。

3歳、4歳、5歳と年齢があがるにしたがって言葉で伝えることや聞いて受けとめることに目を向けがちのように思うが、このように言葉によらない感じ合い、響き合いも同時に大切に大きく育んでいきたい力であると思う。

そして、この時期、このような自然な呼応、響き合いのもとに、学級の子どもたちの気持ちが自然に寄り集まりひとつになってきたのを感じている。

エピソード e 1/31 「みんなのハートを合わせたら幼稚園より大きくなるよ。」

(C：一人の子どもを表す。)

《終わりの会》

T 「前にハートの話をしてたよね。いつごろだったっけ。」

さやか 「運動会の頃」 もとひろ 「9月頃。」

T 「あれからみんなのハートはどんなふうになったかな。」

しんら 「これぐらい。」と手で大きくなったことを示す。

ようこ 「大きくなった。」

りょうへい 「成長した。」

T 「どうしたら大きくなったり、成長したりしたの？」

ようこ 「みんなで仲良くしたから。」

りょうへい 「友だちになったから。つき組と友だちになった。」

C 「ほしさんとつきさんと仲良くなったから。」

ようこ 「つきぐみさんがわっか（フープ）の中でこま回ししてすごかった。」

りょうへい 「ほしぐみさんが色塗ったり、木で（お家を）作っていてすごかった。」

T 「うん。友だちの素敵などころやすごいところを見つけたんだね。」

「みんなのハートがこんなに（手で大きなハートを示して）大きくなったでしょ。友だちのハートもこんなに大きくなったでしょ。大きくなったハートをどうしたい？」

子どもたち しばらく考えている。

C 「幼稚園より大きなハートが欲しいな。」

C 「せかいより」

C 「地球より大きいハート」

T 「いいねえ。どうしたら幼稚園より大きなハートになるかな。」

C 「みんなのハートを合わせたら。」

T 「そうかもしれないね。幼稚園より大きなハートができたら素敵だね。」

C 「世界より大きなハートは世界中の人のハートを合わせたらできるよ。」

ゆう 「東京タワーより大きなハートがいいな。」

さくら組では、9期「ハートを大きくしよう」を合い言葉に生活してきた。

その中で、子どもたちは、葛藤やトラブルを経験したり、いろいろな人と触れ合う楽しさを味わったりしながら仲良しの友だちへのこだわりを少しずつなくし、かかわりを広げてきた。

そして、10期には、エピソードa～eにみられるようにより柔軟に受けとめたり、察知したり、呼応したりする姿が増えてきた。このような変化をとらえ、「大きなハートを合わせよう。」を10期の合い言葉にし、一人一人のよさがより輝き、響き合える学級をめざして生活してきている。

## まとめと今後の課題

### 《ま と め》

生活の中では、いまでも様々なトラブルや葛藤がある。

例えば、友だちとのかかわりがぐんと広がってきた「ようこ」と「さやか」は、「たまには二人で遊びたい。」という思いを表すことがある。「ゆう」はいま、手回しごまに夢中で、回っているごまを何気なく足で止めてしまったこのみに怒りを爆発させた。

一人一人が自分の願いや思いをしっかりともち、それを表しながら生活していく中で、葛藤やトラブルはつきものである。

しかし、一年間を通して様々な友だちとぶつかり合ったり、歩み寄ったりしながらかかわりを広げ、様々な経験を心に刻み込んできた子どもたちは、トラブルがあったからといってその友だちとのかかわりを避けたり、その遊びをやめたりすることなく、自分たちで解決していこうとする姿勢を見せつつあるように思う。また、柔軟に友だちの思いを受け入れようとする姿を表しつつ生活している。

今後も、このような子どもたちの育ちの芽を大切にし、さらに友だちの思いやその子らしさを受けとめ合って生活していけるよう支えていきたい。また、進級後、クラス替えなどを経て子どもたちの姿がどのように変化し、広がっていくのか、引き続き見つけていきたい。

「友だちの思いやその子らしさを受けとめ合って生活していく姿を支える」ためには、次のようなことが大切であると思われる。

- ① 一人一人が友だちとのふれあいの中でどのような経験をしているのかみつめる。
- ② 保育者自身が一人一人の思いを丁寧に受けとめていく。
- ③ 友だちに関心をもちかかわろうとしていく中で見られる様々な姿を大切にし、直接言葉を交わしたり、一緒に遊んだりするというような目に見える姿や形だけでなく、まず関心に向け、思いや雰囲気を感じていくことも大事にする。

実践を通して、次のようなステップを踏んで子どもたちは柔軟に受け入れ合うかかわりや心情を広げていくということをとらえてきた。

- 友だちの遊びや姿に関心を持ち、見つめる。
- 友だち同士の呼応し合う雰囲気喜び、楽しむ

→ 刺激を受けて自分の遊びに取り入れていく

→ 自然に呼応する → 声をかけて仲間入りする → イメージを共有し合って遊ぶ

④ 友だちとの気持ちのぶつかり合いの中で思いを素直に伝え合い、感じ合い、歩み寄っていく過程を大切にする。

自己表出 → 立ちどまり相手の思いを感じ合う → 葛藤 → 自分なりに考える → 歩み寄る

### 《今後の課題》

今年度は、子どもたちの友だちとの葛藤や歩み寄りの中でのこのような育ちを細やかに家庭に伝え、子ども理解を深め合う、という面が十分にできなかった。来年度以降、人と人とのかかわりについて家庭と手を取り合い、より深く考え合っていける関係づくりに努めていきたい。そのためにはまず、子どもたちの姿をどうとらえ、何を大切に保育しているか、という保育者の思いや姿勢を具体事例を通してわかりやすく伝えていく努力を重ねていくことであろうと思う。